

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑤

10月にTJクラブ(タイ・日本ネイチャークラブ)を中心としたラジャバト・プラナコン大学の環境教育の先生方と大学院生が7名来日した。ゴミさん(中込貴芳)、クロ(黒澤事務局長)、私(中込卓男)の3人で夜9時過ぎに羽田空港に自家用車で出迎えに行ったことから始まった一週間であった。船木民宿を貸切り、前半は小菅村の環境・文化を知るプログラム。小菅村の船木直美村長はじめ、青柳諭さん、木下善晴さん、木下稔さん、亀井雄次さん、守屋アキ子さん、広瀬屋旅館さん、いろいろな方々にお世話になり、楽しく満足のいく体験ができた。後半は池袋に宿泊し、博物館等を見学した。プニポン国王がご逝去されたニュースも入りいろいろあったが、贄田くん(だにえる)、ゴミ、ゴメで最終日の案内をし、羽田空港まで見送った(詳細はいずれ、どこかで)。

今回の連載は世界遺産ファイカーケーン野生生物保護区での、今までの探検活動の中で3本指に入るディープな体験を紹介する。 中込 卓男



▲10月、ラジャバト大学のみなさんと小菅村の方々と昼食会(この時は、タイ料理づくり)。

タイの鳥 III

若林 卓司 日記より

2007年8月20日

午後1時前にラージャバト・プラナコン大学のホテルに着く。ゴミさん(中込 貴芳)、ゴメさん(中込 卓男)、初顔合わせの武藤さん、それにチンタナー先生がロビーで待っていた。1時過ぎに迎えのアドゥンさんが来て、チンタナー先生の見送りを受けてウタイタニーに向けて出発した。今回もスンプリーの「100年市場」に立ち寄った。バンコクは朝から晴れた暑い天気だったが、ウタイタニーに近づくにつれて、雲行きがおかしくなり、とうとう強い雨が降り出した。雨季に雨が降らないように望むのもおかしなものだが、バーンライのシリポンさんのパンダキャンプでは去年と同じようにテント生活をせざるを得ないと思っていたので、強い雨は降ってほしくなかった。1年ぶりのパンダキャンプはさらに木々が大きくなり、去年の敷地を流れる川の氾濫のために橋が流されていた。シリポンさん、今回世話になるアドゥンさん等と夕食をとりながら歓談する。パンダキャンプには宿泊施設が2棟できていて、テント生活の危惧はなくなった。



8月21日

9時ごろシリポンさんの奥さんのポータンさんの車で近くにあるブドーン小学校へ行く。幼稚園を合わせて全校生42人の学校で、今年はゴメさんのクラスの学生が小遣いなどを貯めた7千バーツ(1バーツ=約3円)近いお金を寄付した。ポンティップもサッカーボール、バレーボール、それに空気入れを寄付した。理事長が代わっていたが後の先生三人は去年と同じだった。全校生の食費1日200バーツをまかなうための予算がないので、寄付や畑にトウモロコシを植えて売るなどしていろいろ工夫されていた。幼稚園ではち

ようど数字の勉強をしていたのでゴメさんが一緒に入って園児と肩を並べていた。



いったんパンダキャンプに戻り、今度はシリボンさんの運転でオンアートさんの有機農業を見せてもらいに行く。国王の「知るを足る」農業を実践しているのだ。陸稲を植え、ザボンを栽培し、ニワトリを飼い、魚を養殖し、奥さんは空いた時間を機織りに使っていた。肥料は自前でトウモロコシなどの残りを使っていた。また、木炭なども自分で作っていた。お土産にザボンをいくつももらった。



昼からはアドウンさんにシリボンさんが職業学校の環境教育の短期コースの実習に使っているモーターチャイ自然トレイルへ連れて行ってもらった。ここは昨年、カレンの人に案内してもらった記憶があるが、トレイルを新しく作り直したという。先に来て待っていた森林局のフーンさんに先導してもらおう。去年、フーワイカーケーンの管理事務所側に行ったとき会って、いろいろ経歴は聞いているのだが、今回、自然に関する知識がただ者じゃないことがよくわかった。薬になる草木の類をいろいろ教えてもらった。また肉桂の樹皮を削ってその香を嗅がせてくれた。これからシナモンを作るという。鳥に関しても声を聞くだけで的確に種を言い当てることが出来た。明日からフーワイカー

ケーンで案内してもらおうのだが、これは楽しみだと思った。

夕方日本組みはマッサージにバーンライの町に出かけたが、私とポンティップは市場などをぶらついた。ここでイエスズメを見た。スズメと混じるようにして生活していた。スナックのかけらが落ちていたが、スズメがそれを拾ったが、イエスズメのオスがそれを奪い、さらにイエスズメのメスが奪い取った。これがどういうことか私には判断しかねるが、イエスズメがスズメに遠慮しているのではないことはわかる。パンダキャンプにもどって夕食をとる。ここでの食事は主にアドウンさんが奥さんの協力で作っているという。アドウンさんも奥さんもシリボンさんの生徒だと聞いている。シリボンさんは学校の方が忙しらしく私たちの世話が十分にできないことを悔やんでいたが、そのぶんポータンさんとアドウンさんがいろいろやってくれた。日本の3人組みは呑み助ばかりだが、シリボンさん、アドウンさんもけっこういける。夜は遅くまで話をしたが、シリボンさんが去年の顕微鏡（レーベンフックのガラスビーズを利用した簡易顕微鏡）の反響を話してくれた。話は大きくなって、5チャンネルの「緑の世界」という5分ほどの番組だが、パンダキャンプの活動も含めて4回連続で放映されたという。私たちはそのビデオを見せてもらった。

8月22日

昨日の夜の話で校内に自然トレイルを作って環境教育をしている学校の話聞いた。その時私たちは即座に見学したい由を言ったので、シリボンさんが連絡を取ってくれて、朝、ポータンさんの運転でバーンライ・ウィッターヤ中等学校を訪問した。最初に理事長室で環境教育の概況を聞いたり、担当の先生を紹介してもらった。それから校内にある自然林に案内してもらった。トレイルのあちこちに生徒が待っていて簡単な説明をしてくれた。



パンダキャンプに戻るとすぐにフーワイカーケーンに行く用意をした。今回はフーワイメーディーへ行くのだ。フーワイメーディーはバーンライの北 20 キロぐらいのところにあり、谷間にあるカレン族の集落を越えていく。最奥のカレンの集落は広い谷間にあり、陸稲ばかりでなく水田もあった。



ここまでの道は一部工事中で道を拡張しているところもあった。悪路とはいいいかねるがピックアップの荷台に乗ったゴメさんと私はラテライトの埃を浴びて赤紫に染まってしまった。車はアドゥンさんの運転する 4 輪駆動だったが、ここから真の威力を発揮した。フーワイメーディーまで残すところ 2 キロほどだったがゴメさんと私は荷台に立ち上がって過ぎ行く森の景色を楽しんだ。途中で数頭のタイ語でリン・ウォーク (Rhesus Macaques) というサルを見た。目的地に着くと同時に 1 羽のワシを見た。カワリクマタカ (Changeable Hawk-Eagle) の若鳥だった。さっそくフーンさんの出迎えを受けた。池の畔にサイの木があって、実がなっていた。そこにハシブトアオバトやシロボシオオゴシキドリ等が集まっていた。昼食をとり、宿泊所に荷を置いてから、20 キロ近く奥にカオバンダーイというところがあるのだが、そこへの道を 2 キロほど歩いた。



辺りは竹を含む雑木林が覆っている。途中で何度もフーンさんに動物の足跡の説明を受けた。ちょうど雑木林がテン・ランと呼ばれる落葉樹林帯に入ったところでトラの足跡があった。その近くにウワデーと呼ばれるちょっと赤っぽい大型の牛の足跡もあった。フーンさんはどちらも子供連れだといった。私たちはどうしてそんなことがわかるのか不思議だったが、そこに立ち止るとぷーんと死臭が漂ってきた。トラの母親が子供に狩りを教えるときは、被害者を一気にかみ殺さず、子供に止めを刺させるという。被害者は大変な苦痛にさいなまれるという。ここでもそんな悲劇が起こったのだろうか。帰路に着くころから少し雨が降り出した。夕食のときフーンさんはここに泊りがけで来た外国人は私たちが初めてだといった。世界遺産のフーワイカーケーンに泊まるためには森林局の許可がいるのだが、管理事務所のある北側が一般的で、フーワイメーディーは簡単に許可が下りないそうだ。シリボンさんとフーンさんの尽力のおかげだと思う。暗くなってから森の中にある人工の又夕場に案内してもらった。残念なことに動物には出くわさなかったが、又夕場には今までいたと思えるシカの足跡が残っていた。ここで、ゴメさんがフラッシュ型の体長 1 cm ほどのホタルを捕まえてくれたが、私の不注意で逃がしてしまった。しかし、宿泊所の周りでマドポタルのオスを一匹捕まえた。いつもは 10 時に電気が消えるのだが、私たちが来ているというので消灯は 12 時になっていた。しかし私たちは水浴びを済ませると早く寝てしまった。

8月23日

早朝、探鳥をした。声の割にはなかなか鳥の姿が見えなかったが、どこからかウィツツウィツツと空を切る音が聞こえてきた。私は皆と離れてサイの落ちた実を捜していたのだが、見上げるとサイチョウが 7 羽飛んで行った。シワコブサイチョウ (Wreathed Hornbill) だった。雄大な飛翔である。後で聞いたところによれば先に 2 羽飛んで行ったので全部で 9 羽いたというが、音がするなりフーンさんが家屋より飛び出してきて、皆に教えてくれたという。また、カワリクマタカの若鳥がピーピー鳴きながら近くまで来た。フーンさんの話ではもうここに 2 か月ほどいるという。まだ餌取りが下手で、この前リスをつかんだまではよ

かったが、逆にリスに足を噛まれて、まだびっこをひいているらしい。食後はフーンさんが整備したというトレールに入った。まず、昨夜の又夕場に塩をまいた。



私たちがここに来たことに敬意を表してフーンさんが私達にやらしてくれたのだ。塩まきは2ヶ月に1回ほどの割ですという。動物の中には保護区の範囲を越えて、人家近くの又夕場に行き撃たれることがあるので、こうして人工の又夕場を作っているという。タノン・トンチャイ山脈は、雨期にヤマビルがひどいというが、ここは高度が360メートルほどしかなくヤマビルがないという。カオヤイなんかではこの季節ちょっと森の中に入ろうならたちまち足にまとわりついてくるのだが、ここは快適である。川辺でフーンさんはパックスートと呼ばれるシダを摘んでいた。



今晚の私たちのおかずにするという。ここでもフーンさんにいろいろ薬草などについて説明を受けた。ナンバンギセルのような花があったのが印象的だった。2時間ほどトレールで時間を過ごした後、特別のプログラムが待っていた。本来なら許可が下りないのだが、フーンさんの計らいと所長のブンナートさんの裁断があったと思う。私たちはアドンさんの運転で昨日の道を辿った。道は何ヶ所も沢があり、その部分は丸木が何本か渡してあるだけだが、アドンさんは慎重に

その橋を渡って行った。昨日も来た。ちょうど森の景観が変わるところから、右側にある川に下りた。まずは昼食で、持って行ったごはんを草地に広げて食べた。



私達はどこへ行くのか知らなかった。川の中に入るが、大丈夫かとフーンさんが聞くので、皆に言うと全員OKと返事があった。私は目の前の川を渡渉してどこかへ行くのだろうと思っていたが、その川がルートになった。メーディー・ノーイ川と呼んでいるそうだ。川は深くはないが、流れが少し急で、川底は砂地だがときたまヌルヌルした石があった。さっそく緑色の金属光沢のカワトンボにみとれていたポンティップが足を滑らして、川底にしりもちをついてしまった。靴に砂が入り込んでくるので歩きにくかったが、思わぬルートに今回はなかなかワイルドだと皆、心は弾んでいた。



私たちは川を歩いたり、川岸の獣道を歩いた。川岸は砂地になっていたり、小さな砂州があった。そこにはいろんな動物の足跡があった。クジャクの足跡があった。クマの足跡があった。ゾウ、インドヤギウ（クラティン）、トラ、カワウソ・・・。



けっこう歩いたなと思ったところ、川が向かって左に曲がりこんでいるところが又タ場になっているという。右には土状のがけがあったが、そこに何条か細い溝が掘られていた。フーンさんの話ではゾウの牙の跡だという。ゾウがこの土を削り取って食べているのだ。フーンさんが目的地はこの奥にあるという。そこには大きな又タ場があるらしい。上部に上がっていくと竹が密生していて、あちこちに獣道が走り、ぷーんと獣のにおいが鼻を衝く。しばらく歩くと山中の広い開けたところに出た。そこが又タ場だった。何も見えなかったが、繁みでこちらを見ていたものがいたのだ。



私達が又タ場を歩き出すと大きな叫び声が聞こえ、竹を折って逃げていく音がはっきり聞こえた。フーンさんがあれがインドヤギウダという。ポンティップは2頭の黒い塊が繁みに消えていくのを見たらしい。雲行きが怪しくなってきたが、競技場ぐらいの広さがあると思える又タ場を歩いた。モモアカヒメハヤブサ (Collared Falcon) がずっと高いこずえの先にとまっていた。また、ヨコジマオナガバト (Barred Cuckoo-Dove) も見た。強い雨が急に降り出した。たちまち私たちはびしょ濡れになった。川に戻る小さな又タ場の辺りは粘土がヌルヌルになっていた。帰路は同じルートを辿ったが、フーンさんは陸路を多く歩いているようだった。しばらくして雨は小降りになったが、川が増水すれば危険なこともありうると思った。突然前方から「ナーク (カワウソ) がいる。」とフーンさんの声川辺の背の高い草の間から水に潜る寸前の黒い塊が見えた。宿泊地に帰ってから水を浴び、さっぱりした。夕食にはパケットがでた。かぼちゃのつるもでた。

その席でフーンさんが特に帰路、雨の中、ゾウやトラに出くわさないか心配したという。繁みの向こうでトラが餌を食べていることだって十分考えられるという。私たちは暢気なもので本当に何も考えていなかった。

た。フーンさんは雨が降らなかつたら又タ場に潜んで、動物を観察しようと考えていたらしい。フーンさんは長いフーワーカーケーンでの生活のいろいろな体験を語ってくれた。私たちが興味があったのはゾウにであった時どうするかということだった。昨夜も語ってくれたのだが、フーンさんの持論はちょっと高いところ (精神的に) から動物に思いやりをかけて話してやればたいていの動物はいうことを聞くというものだった。その例としてゾウやトラでの経験を話してくれたが、むしろ私たちがそんなことできるわけがない。それで、森を歩いていてもっとも出会う可能性のあるゾウについて知りたかった。フーンさんが言うには距離があればこちらから身を引けばいいが、ゾウが迫ってきたら横に逃げるのがポイントだという。



宿泊所に帰ってから、ゴミさん、ゴメさんとTJクラブについて話した。今回もラージャバット・プラナコーンの先生は来なかったが、これからどうしていくかというものだった。日本側はバーンライに落ち着いて活動をしたいと考えているが、タイ側の先生はそうしたいとは思っていない。名案は出なかったが、双方できちっと話すより方法がないだろう。

8月24日

朝は探鳥する。昨日のようにサイチョウが飛ばないかと思ったがどうもダメだった。しかし、コウハシシヨウビン (Stork-billed Kingfisher) がきれいに見えた。





いるのは分かっていたのだが、今回は池の畔から突き出た竹の枝に長い間とまっていた。今日は午後1時からパンダキャンプでバーンライの学校の先生に日本の3人が簡単な理科教室を開くことになっている。事務所の前でフーンさん、ブンナートさんと一緒に記念写真を撮る。来年はカオバンダーイへ行けたらいいなと話しながら別れる。



途中でカレンの集落により、去年買えなかった織物を買う。ポンティープはマフラーを一つ買った。

パンダキャンプに戻ったのは12時近かった。シリポンさんは今日来るといふナレスワン大学の教育学部の学生70人ほどのためにテントの設営に忙しそうだった。昼食をとってから、簡単な打ち合わせをする。3人はすでに大半の準備をしてきているので、私はキーになりそうな言葉を選んでタイ語に直しておいた。1時には20人ほどの先生が集まってきた。生徒も何人か来ていた。木炭とアルミ箔と塩水を使った乾電池、去年のものを改変した顕微鏡、段ボール箱を使った空気砲、ストローを使った楽器等、みんなでむっつの項目を説明した。先生方は非常に興味を持たれたようで、どの項目も自分で実験されていた。3時すぎに一段落した。ゴミさん、武藤さんとパンダキャンプの

敷地をうろうろしていたら、シリポンさんが少し周りを案内したいと言い出した。それで車に乗ると例の修道院へ連れて行ってくれた。ゴミさんも私ももう3度も行っているので行ってみたいとは思わなかったが初めての武藤さんにはよかったみたいだった。パンダキャンプに戻るとゴミさんとポンティープが今日のナレスワン大学の学生に使う名札を作っていたので、私達も手伝う。しばらくして学生がそろそろやってきた。夕方に小学生の演じるラオ・ヴィエンの踊りがあるという。シリポンさんはそれを見て帰れという。暗くなるころに踊りは始まったが、あまりゆっくりするとバンコクに着くのが遅くなるので7時過ぎに腰を上げた。プラナコーンに着いたのは10時過ぎて、シリワット先生が迎えてくださった。(終)

